
とある魔術の禁書目録 一大罪者一

黒羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録 ―大罪者―

【Nコード】

N0604Y

【作者名】

黒羊

【あらすじ】

超能力が一般科学として認知される学園都市。そんな場所得上条当麻が魔術師なんていう胡散臭い少女と出会っているとき、隣の部屋でも不可思議な少女を拾った少年がいた。

巻（前書き）

- ・アニメではなく原作沿い
- ・超電磁砲はアニメもマンガも見えないのでよくわかりません
- ・時間軸に矛盾でる可能性大。
- ・作者はパソコン初心者
- ・文章打つのに慣れる練習なので更新は遅い
よろしくお願いします。

壱

七月二十日。今日より、いや実質的には昨日の授業が終わったその瞬間から夏休みは始まっている。それは彼——神矢^{かみや} 真夜^{しんや}も同様であった。

昨夜不良と追いかけてこする事も、学園都市最強の能力者に追いかけられる事もなく、今朝がた何故か止まっている電化製品の数々にも偶然食品が空だった冷蔵庫に被害はなく、朝食のカップ焼きそばを流し台にぶちまける事もなく、キャッシュカードを踏み砕く事もなかった。

特に幸運でもない普通の夏休み初日を、学生寮で神矢は迎える。

「いい天気だし、布団でも干そうかな」

食べ終えた焼きそばの容器をゴミ袋に入れ、窓を貫く夏の空を見上げる。

乱れた布団を畳んで持ち上げ、ベランダに繋がる網戸を足で開ける。ベランダに出ると、既に何かが干してあった。

「カップ？」

カップ。頭に皿がのってるキュウリ好きの妖怪ではなく、雨の日に

着る雨具の一つ。黄色のカップが、我が家の柵に干されていた。だがしかし、昨夜は特に雨だった記憶もなく、それ以前に神矢はカップなど持っていない。

よくよく見れば、干してあったのはカップを着た少女だった。

「へ?」

藍色の瞳をまん丸にする。

一体どういう状況になればベランダの柵にカップ姿の少女が干されているのだろうか。

茫然する神矢だったが、ぐったりと垂れ下がっていた少女の体がピクリと動く。下がっていた少女の首がのそりと上がる。紫色をした不思議な髪の間隙から、同色の瞳が気怠そうに神矢を見る。

少女の容姿は文句なく可愛らしくあったのだが、どうもそれだけではない。見た目小学生ぐらいなのだが、小学生らしい顔を何一つしていない。どこか酷く、歪んで見えた。

だが神矢が慌てたのはそんな事ではない。

「は、裸っ!？」

少女は裸だった。正確には素肌に直接黄色のカップを羽織っただけの格好。

流行やファッションに疎い神矢だが、そんな奇抜な服装が流行っているとは思えない。

神矢の反応など聞いていないのか聞こえていないのか、少女は相変わらず気怠げな視線を向けたまま、呪いでもかけるようなおどろおどろしい声で言った。

「ヌシ、美味そうじゃの」

神矢は背筋に寒気が走った。

日本人とも外国人ともいえない顔立ちだったので日本語を喋った事についてはさして驚かなかった。だが、少女に声をかけられた瞬間背筋に寒気が走った。怖気と言ってもいいかもしれない。こんな年端もいかない少女相手に何故なのか、わからない。

「えーと」

気を取り直して、とりあえず聞き返してみる。

「美味しそう？　僕が？」

「ヌシ意外誰がいるんじゃ」

けっ、とぞんざいな言葉遣いの少女。喋るとますます少女に見えない。ぐきゅるる、と少女の露わになった腹が鳴った。

「腹が減った」

じっと見てくる少女。『美味しそう』ときて『腹が減った』となると、自分は食べられてしまうのだろうかと冷や汗。しかし相手は巨大な化け物などではなく、変ではあれど少女。変だけど。

「とりあえず入りなよ」

曖昧な笑顔を浮かべて、神矢は非日常を招き入れる。

「不味い」

渋い顔で新たなカロリーメイトを口に放り込む。これで既に三箱あげた。

カップ麺は先程の焼きそばが最後で、冷蔵庫には食品はゼロ。仕方なく、非常食に置いてあったカロリーメイトを空腹の少女に与えて

みたのだが……。

「不味い」

不満らしい。しかし手は止まらない。

あれは大ききの割になかなか腹にたまるのだが、少女はまるでスナック菓子のように次々と平らげていく。

「次」

「ごめん。もう無いや」

「なんじゃ使えん」

舌打ちまでする。良くいえば優しい。悪くいえば気弱な少年は、傍若無人な少女の態度にも笑って応対する。

ちなみに、少女の格好は依然黄色のカツパのままだ。ただし胸は神矢の家にあったさらしで隠した。しかしさすがに女性、それも少女の下着など男一人暮らしの家にある筈もなく、嫌々する少女に無理矢理ブカブカの短パンを穿かせた。丈が長くて足首まで覆っているが。

かくして、さらに男物の短パン。その上に黄色のカツパというヘンテコ過ぎる格好を少女はしている。裸カツパとどちらが変かと問われると難しいが、倫理的には現状の方がマシである。絶対。

「とりあえず君の名前は？」

「己が名乗らず、れでいーに先に名乗らせるのか。無礼者」

「……僕は神矢 真夜」

もう諦めたのか、神矢は素直に従う。すると神矢の名を訊いた少女は片眉を引き上げて反応を示した。

「カミヤ シンヤ……なるほどなるほど」

口の中で転がすように復唱して値踏みするようにジロジロ見てくる。

「それで君の名前は？」

「ベル。どうじゃ？ 見た目通り、可愛い名じゃろう？」

ニヤリと口の端を上げる少女。可愛いというには抵抗のある笑みだ。

日本語がペラペラだったが、どうやら日本人ではなかったらしい。かといって紫色の髪や瞳の国なんてあったらどうかと、内心首を傾げる。

「ベルちゃんは」

「気色悪い。ベルでよい」

折れそうになる心にめげず、続ける。

「ベルは僕の家ベランダで何してたの？」

「干されとった」

「干されて……どういう意味？」

「気持ちが良くて寝ていたのだが、寝ている間に腹が減ったのう。気付いたら動けなくなっとった」

と、ウインク混じりに言われても神矢は反応に困る。

気持ちが良くて他人の家のベランダで寝ている事も信じられないが、神矢の部屋は七階。向かいビルだし、部屋の扉には鍵だっっている。一体何処から、どのような手段で彼女が神矢の部屋のベランダで干されるに至ったのかさっぱり見当がつかなかった。

そもそもベルはどこからやってきたのだろうか。この街は世間でいう最先端を遥かに凌駕する科学都市。住人の行動は、衛星カメラその他様々な角度から監視されており、よそ者の侵入など即座に発見及び排除される筈なのだ。

「シンヤ」

いきなり名前で呼ばれた事に少しドキリとした。しかして彼女は、友好的とは程遠い笑みで告げる。

「腹が減った」

副音声で『食べ物買ってこい』という声を聞き取った神矢はため息を吐く。ふと、今日は隣の部屋も騒がしいな、と逃避してみた。

「思ったより遅くなっちゃったなあ」

右手に買い物袋をさげ商店街を歩く神矢。バスでも乗ればもっと早い、どうも乗り物は好きになれず可能な限り徒歩を好む人物は、この学園でも稀有な存在であろう。しかしまあ、歩いていると予期せぬ場面とに出くわす事も少なくない。それが良い出来事か、ただの厄介事かどうかは別にして。ただし、そのほとんどが後者である事を神矢は経験から知っている。

「なあいいだろ？ おれ達と遊ぼうぜ」

ふと聞こえた声に目を向ける。飛び込んできた光景は、一人の少女が複数の男に囲まれているというべったべたな厄介事^{トラブル}。

神矢は辺りを見回す。通行人たちは勿論気付いているだろうが、皆目を合わせないように通り過ぎていく。警備員^{アンチスキル}か風紀委員^{ジャツチメント}辺りに通報はされているだろうが、駆け付けるまでまだ時間がかかるだろう。かといって、厄介事に好んで首を突っ込む物好きも少ない。

かくいう自分もその一人だった。無関係な事に率先して関わろうと思える程、神矢は奇特な人間では——否、余裕のある人間ではなかった。『なかった』というのは、昔ならと付け加える必要があるからだ。

「ふう」

ため息ともつかない吐息を漏らし、神矢の足は帰路からやや外れて厄介事^{トラブル}の中心に向けられた。



どうしてこうなのだろうか、と御坂 美琴は考える。手品でも魔法でもない、本物の能力開発を行う此処学園都市にて、最高位のレベルを与えられた七人の一人。『超能力者（レベル5）』第三位の電エレクトロマスタスター撃使い。この学園で自分を現すならこんなところか。

そんな自分はどうかやら絡まれやすい体質なのだと最近自覚しつつある。お嬢様学校に通う身分にしては自分は少し俗っぽいとは思うが、そんな態度がこの手の馬鹿を引き寄せてしまうのだろうか。

美琴を囲む複数人の男達。一見すれば危険極まりない光景だろうが、当の本人である彼女に焦りはおろか怯えすらない。なぜならその必要がないから。

この街では腕力に訴える暴力、イコール最強にはなりえない。そんなものより能力開発によって開花した能力の優劣が力を決める。美琴はこの学園都市においてその最高位を頂く存在。つまりそれはそのまま彼女の強さを表しているといつて過言ではない。目の前の男たちなど彼女にとって物の数ではない。

むしろ美琴は感心する。男たちは自分の事をまさか超能力者（レベル5）だと知って声をかけてきたわけではないだろうが、この制服は学園都市ではそれなりに有名な、高位能力者が集まる学校のものである。高位能力者の力の危険性は彼らとて知っている筈だが、迫力だけで押し切れるとも思っているのだろうか。所詮女だと見くびっているのだろうか。

（もういつか……）

ぐずぐずしていると通報を受けたアンチスキルやジャッチメントが

やってきかねない。美琴にとってはそちらのほうが面倒だった。隠しもせず堂々とため息を吐き、男たちを撃退すべく能力を、

「あのー」

男たち、そして美琴が視線を向ける。そこには少年が立っていた。少年と言っても美琴よりは年上で、多分高校生。茶色の髪に藍色の瞳。右手に買い物袋をさげ、左肩には細長い布袋——おそらくは竹刀袋——をかけている。無意識に期待していた人物ではなく、美琴はやや残念な気持ちになる。

（ってなによ残念で！ 別に『アイツ』じゃないからってなんだってのよ！）

一人勝手に心の中でうがー、と喘いでいる美琴をよそに、男たちが少年に詰め寄る。

「なんだ兄ちゃん。なんか用か？」

「いやあ、用というかなんというか……」

歯切れの悪い少年の態度に、男たちの苛立ちが募る。

「そういうの、やめませんか？」

言った。言ってしまった。

『なんで』美琴はそう思わずにいらなかった。なんででしゃばった。自分は大丈夫なのに。いや仮に大丈夫でなくても、美琴がどんな目にあおうが彼には関係のない話だ。知り合いだったなら少しは納得も出来るがこの少年とは完全無欠に初対面だった。

それなのに……。他の人たちのように見て見ぬふりをすればいいのに。別に美琴は薄情だとは思わない。恨んだりなんかもしない。彼には初対面の自分を助ける義理も義務も権利だってありはしない。それなのに。

「—————」

そうか。そうだった。いるのだからこういう人間が。ついきさきほど思い浮かべたアイツも、こういったシチュエーションで出会っていたことを思い出す。

「なるほど、そうだな。つまり……」

少年の言葉に男の一人が笑う。ただし目は笑っていない。

「死にてえってことだな！」

拳を振り上げる。全体的にひよろりとした体型にあの態度、どう見ても美琴には少年が荒事に向いているとは思えなかった。ただのお人好しなら巻き込むのも可哀そうだ。そう思った美琴は、精密な操作のもと電撃を飛ばす。

男たちの数と同じ、五の紫電が蛇のようにうごめく。電撃は男たちに当たり気絶させる。———そうなる筈だった。

一番に狙ったのは当然少年に殴り掛かった男。しかし、少年は自ら男との距離を縮め足をひっかけて横転させる。見事な足技に男は勢いそのまま地面に顔面を強打する。それまではいい。

問題は、いままで男がいた位置に少年が割り込んでしまった為電撃が彼に向かっていている事だ。

(ばっ……！)

顔を青くする美琴だったが、幸いにも電撃は少年を紙一重避けて彼方に消えた。

ほっとするのも束の間、仲間の一人が背後から少年に殴り掛かる。今度こそと紫電を放つが、さきほど同様少年は身軽な動きでそいつをあしらう。紫電は再び虚空を弾けた。

それではようやく美琴も違和感に気付く。少年が多少なり動けるのはわかったが、こうも偶然が重なる筈がない。この街で第三位の脳が答えを弾き出す。こんな偶然が続く確率は零だと。

結局、美琴の電撃はただの一度も男たちに当たることはなく、全て

少年があしらってしまった。それも両手がふさがったままで。

「ちょっと 안타!」

「ああ、大丈夫だった?」

よく見れば息ひとつ乱してやしない。

「なんで邪魔したのよ?」

感謝の言葉が出るよりも先に少年を問い詰める。少年も美琴が言いたいことが伝わったらしく、頬を掻くようにして曖昧な笑みを浮かべる。

「だって、危ないと思ったから。そういうの」

(やっぱり……)

少年は認めた。先ほどの彼の一連の動きは、向かってくる不良を撃退するだけではなく、美琴の電撃から無防備な男たちを守る為にとごく軌道から外したのだ。

美琴の能力は音速よりも速い文字通り『光撃』だ。躲すのも至難であるそれを、躲させるとは。

「アンタ一体どんな能力使ったのよ？」

「能力？ 使ってないけど……」

「はあ!？」

能力を使っていない？ 能力を使わずに、電撃を回避したと本気で言っているのか。美琴はじつと少年を見る。

へらへらと困ったように笑う彼。どこからどう見てもスーパーマンには見えない。

「えーと」

見られているのに気恥ずかしさを感じたのか少年は身を引きながら。

「君も気を付けて帰ってね、お嬢ちゃん」

「おじよ——」

少年は野次馬の視線から逃れるようにすたこらと立ち去ろうとする。

「私には……」

これは美琴にとって反射的な行為だった。あまりにもいつもの『アイツ』とのやり取りを酷似していたが為に、つい。

「御坂 美琴ってちゃんとした名前があんのよ!!」

「ええっ!？」

後に反省する。彼に対しては名乗った事すらなかった。



なぜこうなった、と神矢は考える。少女を助けようと思い首を突っ込んだはいいいものの、結果的には不良達を助けた形になってしまったがそれはまだいい。解決したならまた厄介事が起きる前にさっさと立ち去ろうと思ったのだが、なぜ少女は突然激怒したのか。

「私には、御坂 美琴ってちゃんとした名前があんのよ!!」

（初耳だけとおお!？）

振り返ると、少女改め御坂 美琴の前髪から電撃の槍が放たれる。先ほどの紫電よりよほどスピードと威力に優れているらしく、神矢が攻撃を受ける疑問を抱く余地も与えず、既に手遅れだった。完全には躲せない。

体を捻り、電撃の軌道からなんとか逃れられたのは体だけ。流れる体に合わせて引かれていた買い物袋は不運にも逃げ遅れ、哀れ槍の餌食となった。

電子レンジでチンなどと易しい結果であろう筈もなく、ビニール袋は焼き貫かれ、野菜や肉は爆散し、最後に宙を舞った卵パックがグシャリと切なげな音をたてて亡くなった。

「……………」 美琴。

「……………」 神矢。

ウィーンと機械的な音を立てて現れたのは、街を巡回するドラム缶型の清掃ロボット。ロボットは足周りに装備されたモップで地面にぶちまけられた食材だった物を綺麗に回収。そこらを二往復程すれば、まるで初めからそこには何もなかったかのように痕跡ひとつ残さず掃除を終える。役目を終えたロボットは何も言わず去っていく。無言のまま、二人を残して。

「……………」 神矢はうなだれる。

「……………」 美琴は思わず目をそらした。

およそ二日分の食糧が誰に食べられる事もなく消失した。特別ではない、誰にでも定期的に訪れる平凡な不幸だった。

式

『のろま』。帰ってきて出迎えてくれた言葉がこれだ。

美琴との一件を経て、再び買い出しに商店街に戻り帰宅。おまけに、たかだか学生の神矢に二度の買い出し後にバスに乗る贅沢が許されるはずもなく無一文の帰宅。美琴は弁償すると言い張っていたが、たとえ自分に非がなくとも年下からお金を受け取る度胸など神矢にはなかった。なので食い下がる彼女を実力行使で巻いていたのも、結果帰宅が遅れた理由の一つである。

帰ってみれば、空腹による筆舌しがたい目でベルに睨まれて神矢は本気で逃げ出したくなった。しかし逃げれば命がない事を直感的に悟り、とりあえず全力の謝罪と迅速に夕飯の支度に取り掛かる事にした。

「のろま。愚鈍。でくの坊。うすのろ」

呪詛のように居間から延々と罵声を浴びせてくる少女は、ガジガジとテーブルに噛り付いている。果たして料理が完成するのか先か、テーブルが少女によって食べられてしまうのが先か。本気で心配になる。

完成したパスタを皿に分け、レトルトの明太子ソースをかけて居間へ。どうやらテーブルは無事らしい。
少女の目の前と自分の前に置く。

「おお！」

ベルの目が輝く。この時初めて神矢には彼女が年相応の少女に見えた。

フォークを渡し、手を合わせる。

「いただきます」

神矢が言い終えるより先に少女の三つ又の矛はパスタに突貫していた。

フォークの使い方など一切構わず、すくっては口に頬張るベルを見て神矢は微笑む。なんでもない事なのに、彼女と一緒に神矢もなぜか幸せな気分だった。

はつきり言って、見ず知らずの少女……それどころか怪しさ満点のベルを、神矢が律儀に世話をしてやる理由だって、ましてや飯を催促されるいわれはない。それでもこうしてベルが此処にいるのは、神矢の住む部屋のベランダにいたのは、神矢が彼女を通報するのではなく世話しているのは——はたして、運命だったのかもしれない。

「むう？」

「どうしたの、ベル」

紫色の瞳が怪訝に歪む。その目は神矢に向いていた。

「カミヤの人間がわからんのか？」

「なにが？」

ベルは面倒そうにため息をついた後、いつも皮肉げに歪んでいる口を開いた。まるで医者に口内を見せる時のように。意図がつかめないベルの行動に、神矢は自然と少女に視線を集中する。小さな口内には、白い歯が綺麗に並んでいる。その中におさまる赤い舌。そこに、妙なマークが一瞬見えた気がした。

カチン、歯を鳴らしてベルが口を閉じる。ただそれだけで世界が変わった——否、世界が元の形を取り戻した。

「な……!？」

鳴り響く警報。聞こえていなかった筈のないそれが、突然耳に入る。今なり始めたわけではない。鳴っていたものが、ようやく意識出来るようになった。異常事態。

「ふん、人払いの刻印による認識阻害」ベルは改めてパスタを口に放りながら「んぐんぐ……魔術じゃよ」

「魔術……これが？」

ベルは不機嫌そうに眉を寄せる。

「なんじゃ、やっぱり知っておるではないか」

「知らない」

「？」

「昔、聞いた事があるだけだよ」

まるで悪い夢でも見ているような気分だった。

真実だ。神矢は魔術なんて代物は知らない。ただ神矢が幼い時、家でその言葉をよく聞いていた。神矢の家はかなり特殊で、『ある目的の為に』あらゆる術を研究していた。それは占いなんてものから一室に複雑怪奇な陣を描いている事まであった。だが父が死に、母が死に兄が死に、幼い神矢を残して家族が全員死んだ今、はたして実際それに効果があったかなんて当時幼かった神矢は知らない。知識として聞いていても見る事のなかった魔術。

それでもこれだけは覚えてる。家族は、本気だった。

「だから僕は実際に魔術なんて見たことなんてないし、実在するなんて今の今まで信じられなかった」

そう言うってから神矢は気付く。目の前の少女はなぜこんな事を知っているのか。なぜこんな平然としていられるのか。魔術なんて言葉を、なぜこうも当然のように口にすることができるのか。

「君は一体……」

「戦っておるな」

食事の手を止めずにベルは言う。

「なんて？」

「戦っているんよ、魔術師が」

『相手は素人じゃけどね』と付け加える。鳴り響く火災報知器の音を背景に、神矢は尋ねる。

「危険、なの？」

神矢の言葉に、少女は目をまん丸にした。そうして可愛らしい口から噴き出たのは嘲笑。

「安全な殺し合いなどあるものかよ」

ひゃっひゃと笑うベル。子供のように、しかし子供らしからぬ笑い。神矢はベルの返事を聞くと無言で玄関に向かう。立てかけてあった布袋から抜いたのは、何の変哲もない木刀。靴を履くまでに至って、ようやくベルから声がかかった。

「何処へ行く？」

「危険なんだよね？　なら助けに行くよ」

ちょっと忘れ物でも取りに行くかのように気軽そうに、まるで落ちていた財布を届けるような当然さで神矢は答える。ベルは一瞬笑うことをやめるほど啞然とする。

「ヌシは関係ないだろう？」

「うん」

「外の奴が知り合いなのかい？」

「わからない。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

どっちにしても助けるのだ、と言って神矢がまた曖昧な笑顔を浮かべる。そんな彼を、ベルは笑う。吐き捨てるように、敵意すら感じ

させる笑み。

「気持ち悪い」

神矢は反論することなく、苦笑を浮かべ部屋から飛び出た。



部屋に残されたベルは自分の分のパスタを平らげる。

「カミヤの人間が人助け」

クツクツと喜劇でも見たかのように独り笑う。その手は、まだ大分残っている少年のパスタの皿へ伸びた。



扉を隔てたそこは、まるで異世界にでも迷い込んだかのように神矢の知る日常から一変していた。

スプリングラーから降りしきる雨の下、血だらけで倒れる少女。それを平然と見下ろす長身の神父。炎の魔人としかいいえない炎塊。何もかもがかけ離れた世界であったが、その炎の魔人を挟んだ向こう側に見知った顔があるのは神矢にとって救いだった。

「真夜!？」

黒いツンツン頭の少年、上条 当麻が神矢に気付いて声をあげる。何もわからない状況だったが、彼の存在があるだけで神矢の行動は決した。

「当麻! 何をしたらいい!？」

叫ぶ。状況の把握より何よりも先に。そうして倒れる少女の傍らにいる赤い長髪の神父が、神矢の存在を認め振り返ると忌々しように舌をうつ。二メートルを超す身長に反して幼い顔立ちの少年だった。漆黒の修道服を纏う、しかし神父と呼ぶには問題のある毒々しいアクセサリーの数々。少年は余裕のない様子で歯を鳴らす。

「次から次に……邪魔だっ！」

少年は懷から紙を取り出す。コピー用紙だ。頭上の水に気を遣う素振りを見せながら紙ごと腕を横に薙ぐ。

「F o r t i s 9 3 1 !」

咆哮と共に、薙いだ腕の軌跡をなぞるように生み出された炎剣が神矢に向かって放たれた。一瞬で周囲の水が蒸発する。

「真夜!!」

友人の声に遅れて、視界を埋め尽くす炎が到達する。

★

放った炎剣が間もなく消えて、赤毛の少年、魔術師ステイル・マグヌスは憤る。誰にでもなく愚かだった自分自身に。黒髪の少年にしてやられた己が殺したいほど憎かった。

ステイルの魔術はルーン（ゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語）による刻印を使うものだ。魔術は同じ意味さえもっていれば大それた道具など必要ない。少女漫画の付録でだって、数と絵柄さえ合っていれば占う事は可能なのだ。たとえ大量生産の、ただのコピー用紙でだって神秘の魔術は生み出せる。

しかし、意味を為すルーンを破壊されれば魔術は成り立たない。黒髪の少年は禁書目録のアドバイスがあったからとはいえそれを見抜き、スプリングラーの水でルーンを描いたインクを崩した。たったそれだけの事で、ステイルの魔術のほとんが無効化されてしまった。こうしている今も、消えていくルーンに比例して炎の巨人の体が崩れていく。

先ほど部屋から出てきた少年。どうやら黒髪の彼の友人だったらしいが、おそらく被害を出さないように張っていた結果もろとも効力が消えてしまい、騒ぎに気付いてしまったのだろう。

（運が悪かったね）

それだけ。ステイルが感じたのはそれだけだった。

たった今殺した少年が、自分の目的とおそらく無関係であったろうと理解していながら彼が感じたのはこの程度。飛び出てきた少年は運がなかった。それだけの事だ。

異常。異常だろう。しかし彼は魔術師だ。常識など破綻していて当然だった。

ステイルは足元に倒れ伏す少女を見る。白い修道服を着た少女。

「……………」

迷いなどある筈がない。たとえ誰であろうと殺す。いくらでも壊す。自分は目的の為にそう決めたのだから。

イノケンティウス

『魔女狩りの王』はかろうじてまだ生きてる。懐のルーンも、この水のせいで使い捨てになるとはいえまだ残っている。たとえばあの黒髪……の少年が魔術を打ち消す力を持っても、これで少年を殺し、少女を回収すれば終わりだ。

決意を固めたステイルの前に少年が現れた。茶色の髪の毛の、ひ弱そうな少年。数瞬前、殺したはずの少年。

「な—————」

ステイルが驚愕しながら、しかし止まる事がなかったのは戦闘のプロであったからだろう。疑問より先に手は懐の紙を無造作に引き抜いた。炎剣が形を成す————より速く、少年の木刀がステイルのルーンが描かれた紙を切り裂いた。今度こそ、ステイルの動きが止まる。

さらに踏み込んだ少年は、刀を地面と水平に構える。とステイルが確認するより先に少年が霞み、強烈な衝撃が横腹を襲った。遠くで黒髪の少年の右腕で弾け飛ぶ炎の魔人を見ながら、ステイルの意識は闇に消える。

★

倒れた魔術師の意識が完全になくなっている事を確認し、神矢は安堵と共に構えていた木刀を下す。神矢は魔術師の放った不意打ちにして通路を埋め尽くす回避不可の炎剣を、一度通路に身を投げ出し、片腕で手すりを掴んで落下を防ぐ荒業で回避したのだ。

事前にベルとの会話で魔術という存在を把握していなければ、初撃の炎剣をこうも上手く躲す事は出来なかっただろう。おまけに炎剣そのものが相手に対しての目くらましにもなっていたようだった。

「真夜！」

「当麻」

駆け寄ってくる学生服姿の少年の名を神矢が口にする。彼の名は上条 当麻。ツンツン逆立てた黒髪に、それ以外さした特徴の見当たらない少年は、人と関わるのが得意ではない神矢が名前で呼び合える数少ない友人だ。また、恩人でもある。

しかし、今の彼にいつもの陽気さは感じられず、神矢の無事を確認すると意識は床に倒れた銀髪の少女に向けられた。

「インデックス！」

少女の名前だろうか、と神矢は不審がらずにいられない。

見た目十四五歳といった銀髪の少女。その服装は、そこに倒れている赤毛の魔術師と同じ修道服。ただし彼女の場合、その色は純白で、随所の金色の刺繍もありまるでティーカップのようだった。

可愛らしい顔立ちをした彼女は死んだように静かに眠っている。否、事実危険な状態だった。

元々雪のように白かったであろう肌は、いまや危険なほど青ざめてさえいる。純白の修道服も、床に広がる彼女自身から流れ出た血の池に浸り赤く染め上げられている。そんな尋常ならざる血の量を、神矢は淡々と見る。

「その血の量は危険だ。早く救急車を——」

「駄目だ！」

携帯を取り出そうとした神矢の手を上条は止める。上条は自分の行動に一瞬はっとしたようだが、視線を泳がせるばかりで何かを話そうとはしない。話すべきか悩んでいるように、神矢には見えた。

「わかった」

「え？」

神矢は携帯をしまう。

「事情は聞かない」

科学都市と呼ばれるこの場所で、魔術なんてものが入り込んだ時点で異常事態に違いない。上条がそんな異常事態に神矢を巻き込む事を迷っているのは、見て察するに明らかだった。しかし神矢は無理に聞き出そうとは思えなかった。

押しの弱い性格から、というのもあったが、理由なんて必要なかった。神矢にとって上条という人間に無条件の信頼を寄せる事に躊躇いなど無い。なぜなら上条 当麻は神矢 真夜の友人なのだから。

上条は何か言いたそうに口を開きかけたが、遠くから鳴るサイレンに気付き結局止める。『ありがとう』それだけ言うと、一旦自身の部屋に戻りすぐまた出てくる。右手に白いフード（おそらく少女の）を持ち、銀髪の少女を背負ってエレベーターに飛び込んだ。

それを見送って———気配に従って振り返る。

女性がいた。腰まで届く長い黒髪をポニーテールに纏めた日本人の女性。そんな彼女を異様たらしめるのは、腰に差した二メートルを超す刀の存在。異常が続くこの場にとって、異様な女性はとてもしっくりくるものだった。

黒髪の女性は見つめる神矢と一瞬目を合わせるものの、すぐに視線を切り倒れている少年神父を抱えた。彼女がいくら女性にしては長

身で、また赤毛の男が少年とはいえ、意識のない人間を支えるのはたとえ支える相手が子供であっても容易ではない。しかし黒髪の女性も軽々とやってのける。

内心驚いている神矢と、女性はまだ目を合わせる。小さくお辞儀をしたように神矢には見えた。

女性はそうして手すりを飛び越える。女性と、それに支えられる少年の体は重力に反して上昇し、向かいのビルの屋上に消えて行った。彼女もまた少年神父と同じ魔術師であろう事は間違いなかった。

「さて……」

辺りを見回す。焼け焦げたところか一部融解すらしているこの場を眺め、神矢はかゆくもない頬をかいた。

「なんて説明しよう」

段々と近付いてくるサイレンの音を背景に、神矢は一人終わった戦場で佇む。

参（前書き）

ちよつと短かったです、区切りが難しかったので

参

昨夜は酷い目にあつた。結局一人で現場に残される事になった神矢は、やってきた風紀委員ジャッジメントに事情説明を求められた。とはいっても全て正直に話すことは出来ない。友人との約束があるので、謎の少女、それと襲撃してきた魔術師についても誤魔化しながらの面倒な報告になった。

そもそもこの街の人間に魔術なんてものを訴えても神矢の頭が疑われる。

なので、この火災は通りすがりの学生能力者による通り魔放火、ということにした。事故にするには被害が大きすぎたので、嘘をつくにも多少の真実を織り交ぜる方が効果的なのだ。しかし、神矢の事情聴取をしていた風紀委員の少女、これがなかなか優秀らしく悉く神矢の報告の穴を突いてきて厄介なものだった。ツインテール少女。

そういえばあの風紀委員、いつぞやの電撃少女——御坂 美琴だったか——と同じ制服だった。はて、どこの制服だったか。結構有名な所だった気がするが、元々そういった世間の流行には疎い神矢は思い出せない。

「まったく物好きなヤツめ」

声に反応して神矢が振り返る。ベットに寝転んでどこから持ってきたのかスナック菓子を食べる黄色のカツパ姿の少女。

「いつ戻ってきたの？」

「さっき」

昨夜は運良く現場の寮には神矢と上条を除いて不在だった。この場合運良くというのは語弊があり、おそらくあの魔術師が何かしらの処置をしていた可能性が高いが。

しかし念の為ということで、実際に火災があった友人部屋付近の部屋は消防の人間が改めて不在を確認した。そこでギリとしたのは神矢。実は神矢も、この場を去った友人と同じく不思議な———というより怪しい少女を拾っていた。そしておそらく、彼女は本来この街に入るのに必要なIDを持っていない。

基本『外の人間』を嫌う傾向の強いこの街で、IDいるはずのないを持たない部外にん者げんが見つかれば大騒ぎになる。相手が少女だったとしてもこの街は容赦しない。

しかし神矢の心配をよそに、神矢の部屋にベルはいなかった。テーブルには空になった大皿が二枚だけ。

一時は神矢も彼女が夢か幻、もしくは幽霊の類だったのではないかと半ば納得しかけていたのだが彼女はいまこうして神矢の部屋のベットでぬくぬくと寝転がっていた。少女が戻ってきた事に少しほっとしている自分がいることに神矢は驚いた。

「うむ……意外とイケる」

「物好きって？」

『激辛甘 新感覚チップス（シークワ―サー味）』と銘打たれた甘
いんだか辛いんだか酸っぱいんだかわからないに菓子をざらざらと
口に流す少女へ、神矢は尋ねる。

「ワシの記憶じゃあ、カミヤの人間に人助けをするような人格者が
いるとは思わなかったわ」

神矢の表情が確かに強張った。その反応にベルは嬉しそうに口の端
を歪める。

「……神矢を知ってるの？」

「知らんね。ワシはワシが知ってる事しか知らん」

それ以上話す事は無いというようにそっぽを向くベル。神矢として
も、これ以上神矢の家について突っ込まれても冷静に会話できる自
身がなかった。それでも訊いてみたかった。

「ねえベル。神矢は……父さん達は魔術師だったの？」

昨日初めて知った神秘の術。否、正確には知識として聞いていても、
実際に触れるには至らなかった領域。魔術。

昨夜神矢の友人を襲った赤髪の神父はその神秘を扱う魔術師であっ

た。魔術は存在する。それは神矢も身をもって理解した。

なら、ならば神矢が幼い時、あの狂気染みていた儀式や意味不明の呪文を唱えていた父は魔術師だったのだろうか。毎日札をめくっていた母は、異様な恰好をしていた兄は。

目の前の少女なら知っているとと思った。神矢の知らなかった魔術に精通し、おそらく神矢の家を知る彼女ならその答えを知っているのではないかと。

ベルは空になった菓子袋を放り捨てる。

「あれらを魔術師と呼んでいいかなど知らん」とてもつまらなそうに「だがまあ少なくとも、いい顔をする人間はいないだろうがな」

ベルが何を言いたいのか神矢にはわからなかった。それでも理解出来た事は二つ。

神矢の家が魔術師であれそうでなくても、やはりあの家は外れていたのだという事。――だから、神矢の家族は皆殺されたのだろうという事。

神矢の脳裏に蘇る映像。恐ろしいほど綺麗な満月の夜。炭化した母親。ハリネズミのように体中を串刺しにされた兄。首から先が消失した父親の体。

その他数十の屍の上に、ただ一人佇む少年。少年は月を、見上げていた。

「シンヤ」

意識が現在に戻る。かなり近くに少女の紫色の瞳があった。神矢は反射的にのけぞりながら、

「なに？」

「風呂に行くぞ」

ベルはとんでもないあくどい笑みでそんな事を言い出した。

風呂なら学生寮の部屋にはユニットバスが完備されている。それは勿論神矢の部屋にも。そう言った神矢に、少女はチツチツとわざとらしく言いながら立てた人差し指を振った。

「ばっか。ばかばか。日本に来たならデカイ風呂に決まっておるだろうに」

「へえ。やっぱり外国からしたら日本のお風呂はそういう印象なの？」

「広い風呂に男女入り乱れてウツハウツハなんじゃろう？」

「冗談だよな？ 無いから。そんなお風呂探しても見つからないからね」

珍しくまともな発言と思いきや、ベルはやっぱりベルだった。顔を真っ赤にする神矢にベルが邪悪に笑う。明らかに確信犯だった。

というわけで、少女の願いを聞き届けた神矢は少女と共に銭湯に向かった。本音をいえば、昨日の食糧爆散により今月はなかなかお財布事情がピンチだったが、女の子の頼みを断れるほど神矢の女性スキルの熟練度は高くない。なにより、この少女に口でやりあって勝てる気がしない。

「ん？」

足を止めたのは神矢だった。進行方向に視線を固定させて。

「なんじゃ気付いたか」

「？」

「ああ……なるほど」一人勝手に納得した顔のベル。「魔術を知ったから、ヌシの眼が魔術を認識出来るようになったのか」

今一度神矢は視線を前方にやる。何の変哲のない大通りの空間に薄

ぼんやりと揺らめく透明なカーテンがかかっているようだった。そして不思議なのが、周囲の人間はそのカーテンより先に決して進もうとはしない。不自然に、自然に、まるでその境界より先に道は無いというように通行人たちはそこを避ける。

それはまるで——まるで昨夜、神矢がけたたましい火災ベルに気付かなかったように。

神矢は無言で、背負っていた布袋から木刀を抜く。その姿を傍らで見ているベルはあからさまに不機嫌そうに頬を膨らませた。

「けっ。また人助けかえ？」

苦笑にも似た笑みを浮かべる神矢に、少女は殺意すら感じる睨みをきかせる。

「ヌシは異常じゃ。魔術師の戦い、それが殺し合いだとわかっていて平然とそこに足を踏み入れる。それが自分の為ならまだしも他人の為だと？」

そんな目で睨まれても神矢は笑う。困ったような、笑み。

「僕はわからないんだ、普通が。そう育った。それに考えるのも苦手だから、どうしても考え方が極端になっちゃう」

「だからなにもかも助けるのか？　それが償いだというなら」ハ

ツと吐き捨てる。「反吐が出る」

「違うよ」

神矢は足を踏み入れる。

「ただ、憧れたただけなんだ」

「？」

足を踏み入れる。魔術師ころしあいの戦いせかいへ。

中はやはり異質な空間だった。夜といってもまだ八時を過ぎたぐらい。夏休みの今ならそれなりの人間が歩いていておかしくないのに、此処には誰もいなかった。この空間だけが外と切り離されたように不気味な静寂。

「人払い」

ふと横を見ると、黄色いカッパの頭頂部があった。

「ついて来たの？」

「ぬかせ」

ぶっすーとした顔で歯を剥き出す。

「ヌシ———というか金がなけりゃ、ワシが風呂に入れんだろうが」

「はつきりいうなあ」

「心配でもして欲しかったか？ 自惚れるな。噛み砕くぞ」

照れ隠し成分ゼロの殺意を向けられて思わず身震いする。

「ステイルの人払いを誰が抜けてきたのかと思いましたか」

声は前方からだった。神矢達は足を止める。

「貴方でしたか」

声の主は長身の女性だった。黒い長髪をポニーテールにしているが、それでも毛先が腰に届くほど長い。上は白いTシャツをへそが見えるよう裾を縛って、下は着古したジーンズ。片脚だけ太ももが露出するほどぶった切られていた。

和美人が西部劇にでてくるような格好で、しかしその手には二メートルを超える長刀が鞘に収まったまま握られている。

神矢が彼女と出会うのは二度目だった。暗がりでもその存在感は圧倒的で、一瞬神矢も見蕩れてしまった。憚る理由は無いというように道路の真ん中に堂々と立つ彼女の足元で、見慣れた少年が倒れている。

恰好以外はサムライ然とした女性は神矢の視線が足元の少年に向いている事に気付いたようだった。

「彼の事なら心配ありません。気絶しているだけです」

「みたいですね」

上条の胸が、小さくではあるが上下しているのは神矢にも確認できた。

それで充分。死んでさえないなければ助ける事は出来る。それを知っている神矢は友人を傷つけた彼女に無策で飛び込むような真似をしないで済んだ。

「随分冷静ですね」

それが彼女には別の意味に取られたらしい。

「この少年を案じているように見えたのですが勘違いでしたか。やはり貴方が神矢の家の人間だというのは本当のようですね」

「知ってるんですか？」

「ええ」女性は目を閉じて「暗殺集団————神矢。貴方はその子供。そうなのでしょう？ 神矢 真夜」

肆

暗殺集団。女性はい、神矢はそれを否定しなかった。なぜなら彼女が言った事は真実だから。

「彼と同様、貴方の事も調べさせてもらいました。私の名は神裂かんざき火織かおり、と申します」

神裂は礼儀正しく頭を下げて名乗る。

「神裂さんは神矢の家を知ってるんですか？」

「……直接出会った事はありませんが。暗殺とは名ばかりで、その実態は殺す事そのものを目的にした殺戮狂。要人、裏の人間、同業者、民間人、動物も含め本当にあらゆるものを」

「神矢は金も名誉も求めていない。神矢はただこの世の全てを殺したいだけ」

神裂の言葉を引き継いだ神矢はそう続ける。

「故に同業にも嫌われる狂った殺害者」

それだけは神矢も幼い頃から教え込まれてきた。神矢は他の殺し屋の人たちのように金を求めるわけでも、裏で名をあげたいわけでもない。ただ殺したい。それだけを目的に殺してきた。

殺したいから殺す。頼まれたから殺す。頼まれなかったから殺す。嫌いだから殺す。好きだから殺す。そこに居たから殺す。居なかったから殺す。理由があつて殺す。理由がないから殺す。殺す。殺し続ける。

最悪にして最低の殺戮者。それが神矢。

「そんな神矢の人間が、一体何をしに来たのですか？」

そんな神矢の姿を知っているからだろう。神裂は不愉快そうな顔で問うてくる。

忌諱の感情は神矢を知る者ならだれでも向けてくる感情だ。殺す事を目的にした殺戮者なんて誰も良い印象など抱かない。それでも神矢は正直に己の目的を言葉にする。

「その人を助けに来ました」

神裂はびっくりした顔をした。

「なんと、言ったのですか？」

「その人は僕の友人で、僕はその人を助けに来ました」

聞き間違いでなかった事に、やはり神裂は驚いた様子だった。それも仕方ない。同業者にでさえ嫌われる、狂った殺害者と呼ばれるような人間がたった一人の友人を助けに来たと言った。それを理由に神裂を殺しに来たのではなく、友人を助けに来たと。

「その言葉を信じろと？」

「神矢は人を殺しても嘘はつきません」

それは神裂も聞いている話だった。それでも彼女はそこに立ち続けた。

「たとえ貴方の言葉が真実だったとしても、此処を譲るわけにはいきません」

その言葉に並々ならない覚悟が込められている事は神矢にも伝わってきた。それでも彼もまた退かない。

「――七閃」

チン、というつば鳴りの音が小さく、しかし確かな存在感をもって響いた。それだけで神矢の体は七筋の軌跡に切り刻まれる。そう彼

女は慢心でもなく事実として受け入れる。———その筈だった。

「な……!?!」

少年は避けた。偶然やがむしやらの回避ではなく、神裂の斬撃を目で追って確実に躲した。それどころか、

「ワイヤー、か」

見破った。ただの一度で神裂の七閃、その正体を見破った。

驚きを押し込め、神裂はもう一度七閃を放つ。傍目にはこれ見よがしなつば鳴りしか聞こえないだろう。事実、神裂は実際に刀を抜いて神速の斬撃を放っているわけではない。その行動はあくまで目くらましで、その動作で操る七本の鋼糸で相手を斬っている。

言うほど簡単でもないように、また簡単に見切れるものなどではない。しかし、少年はまたも七の斬撃全てを見極め躲した。

今度こそ、神裂は動揺を隠すことが出来なかった。

「一体どうやって……」

神矢の一族は思考こそ狂っていても、特別身体能力や魔術に優れているわけではない。なにより、神裂 火織という存在はその程度で

どうにかなるほど簡単な存在ではない。

「僕も少し、特別な力を持ってるんです」

「異能力……」

魔術ではない異能。この街がそういったものを人工的に生み出す場所だというのは神裂も知っている。魔術師である自分には大抵詳しくまで理解出来ないがそれでも納得出来ない。

「貴方の事は調べたと言った筈です。貴方もこの少年と同じく、そういう能力に目覚めてはいない筈では？」

「目覚めていないんじゃないかって、わからないだけですよ」

今度は神矢の方が仕掛ける。神裂が刀を――――否、それに連動した鋼糸を構える。放たれる神速の刃。一つ一つが必殺足り得る威力をもつて、神矢を包み込む。

神矢にはその全てが見えていた。

迫りくる鋼糸の一本一本が。神裂の動き、表情、風の唸り、見えすぎる程その全てが見えている。それこそが神矢の能力だった。

必殺の渦にあえて飛び込み、唯一の綻びに身を滑り込ませる。皮一枚でかいくぐると神裂はもう目の前だった。彼女が何かに対して逡巡する。その隙を『視て』さらに一步踏み込んだ。

胴目掛けて木刀を振る。神裂は鞘に収めたままの刀を盾に防ぐ。激

突。神矢はさらに深く踏み込む。

彼女に今攻撃の意思はない。というより攻撃に迷っている。あの長刀を抜くことを躊躇っている。神裂の動揺、迷い、それによる彼女の行動が回避だということも『視た』神矢は遠慮なく間合いを詰める。木刀の刃を滑らせるようにして押し込み、柄による突きで強襲。しかし予想以上に神裂の動きは速く、結果突きは空振りに終わり離脱を許してしまう。

数メートルの間合いを取る神裂。あの神裂を退かせる。見る者が見れば卒倒しそうな光景だったが、それを為し得た彼は騒ぎ立てる事もなく淡々と刀を構える。

神崎は納得いかない顔で睨みつけた。少年の、黄金に変わったその左目を。

「その瞳……」

「能力を強く解放すると何故かわわってしまうんです」

「未来予知の類ですか？」

今の攻防、神矢は明らかに神裂が動くより先に動いていた。それは経験からなる先読みとかいうレベルではなく、神裂の動きを決めて動いているように見えた。しかもそれに何の躊躇いもなく、気味が悪いほどの確に。あれが運任せだとは思えない。

「正しくは未来予知じゃあないです」

少年は首を振って否定する。

「僕にはあらゆるものが見えるんです」

それは技の起こりを見極めるなんてものではない。踏み込みの強弱。筋肉の伸縮。鼓動。呼吸。発汗。血液の流れ。遠近。対象は相手だけに留まらない。視界に映るあらゆる情報が常人の何万倍にもなつて神矢に流れ込む。それによって神矢が得るのは世界の減速。そして限りなく精密な予知。

この能力を解放している時の神矢には世界が止まって見える。1ドットの動きだって追える。そしてあらゆる情報を観測し、結果生まれるのは限りなく完全に近い未来予知。実際に未来が見えるわけではないが、人一人の動きを先読みする程度容易い。

それが神矢の能力『絶対観測』^{ホライゾン}。

「予知ではなく予測、というわけですか。厄介ですね」

「それだけじゃないですよ」

神矢の金色の瞳が神裂を映す。

「昨日の人もあなたも、インデックスと呼ばれていたあの女の子が目的みたいですけど……すごく大切な人なんですね」

「私の心を……!？」

「違いますよ」

驚愕する神裂に、神矢はバツが悪そうに笑った。

「すみません。これも見えるんです。体温の具合や鼓動の反応で対象の心理状態が視える」

神矢は左目の金色を指す。

「だから僕には神裂さんがあの子を心配している事はわかって、なぜ大切なのか。大切な筈のあの子を怪我を負わせてまで追っている理由がなんなのかまではわかりません」

穏やかに笑う神矢に対して、神裂は辛そうだった。いや思えば初めから彼女は辛そうな顔をしていた。何かに追いつめられたような、まるでこれから親の死に目を見に行くような。覚悟したのではなく、覚悟を迫られた表情。

それこそがインデックスと呼ばれた少女に関係するのではないかと神矢は『観測』する。

「神裂さん、当麻はなんて言っていましたか？」

その質問に、彼女はよりいっそう厳しい表情になる。一見すれば鬼の形相だが、神矢には今にも泣きだしそうな少女の顔に見えた。神矢は足元で倒れる友人を見る。ぼろぼろの体は虫の息で、彼の能力の源である右手は見るに堪えない有り様だった。それでも上条は前に倒れていた。血だらけの拳は握りしめられていた。

「神裂さん、僕には神裂さん達の事情も、魔術の世界もまるでわかりません」

「なら、何故邪魔をするのですか？」

血を吐くような声だった。

「何も知らない他人が、どんな権利をもって私達の邪魔をするというんですか!？」

「当麻があの子を守りたいと願っているから」

「……本気で言っているんですか？ 殺戮者の一族である貴方が、本気でその友人を……他人を救うために戦っている?」

「……あなたの言うとおりですよ」

神矢は殺戮者だ。そして自分も、間違いなくその因果を汲んでいる。

「でも一つだけ間違ってます。僕には誰かを救うなんてこと出来ません」

神矢は足元の少年を見やる。

「それが出来るのはこの人みたいな人達だけです」

「なら」神裂はきつく拳を握って「貴方はなにをするんですか？」

神矢は微笑む。

何をするかなんて決まっていた。自分には暴力ちからしかない。他人を殺す事しかできない暴力しか、神矢の身には宿っていない。あらゆるものを見通す瞳を持ちながら、正しい道なんてまったく見えなかった。

なら使い道は一つしかなかった。

「僕は――――」

正しい道が見えないなら、正しい道を行く彼の背中を追いかけてやうと。

「僕は上条 当麻の幻想ねがいを守る」

この暴力でもって彼を守り、この瞳で彼の背中を見続ける。
こんな自分すら救ってみせた彼の道こそ、誰よりも正しいのだと信じて。

肆（後書き）

実質は前話と合わせて一つでした。

とりあえず神矢の家をちよろちよろと。あと神矢の能力紹介の話でした。

なかなかめんどくさい言い回ししてたら書いてる自分までわけわかんなくなってきました。やっぱり小説ってのは難しいもんです。

ちなみに神矢は『原石』にカテゴライズされます。何故かって？それはそうした方が後々設定の穴を埋めやすいからだよ↑ごめんなさい

さらに補足すると、レベルは0です。何故かって？ じゃないと三巻のあの人（一応伏せる）と戦えないからですよ！！

ではでは、これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0604y/>

とある魔術の禁書目録 一大罪者一

2011年11月5日08時16分発行